

ロアルド・ダールの短編 ‘The Hitchhiker’ に  
おける言語表現とユーモアについて

田 淵 博 文

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第32巻第1-2号 (抜刷)  
2012年9月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 32 No. 1-2 September 2012

# ロアルド・ダールの短編 ‘The Hitchhiker’ に おける言語表現とユーモアについて

田 淵 博 文

## はじめに

ロアルド・ダールの短編 ‘The Hitchhiker’ は、1977年8月の *Atlantic Monthly* 誌に掲載された。ダールらしいブラックユーモアを含み最後が典型的などんでん返し (surprise ending) で終わっている作品である。この短編は、言語表現も巧みで論理構成もしっかりとされていて、ダールが短編作家として「完璧な技巧家」であることを証明している作品である。

本稿では、導入部と展開部と終結部の描写を言語学的に分析するとともに、登場人物の一人であるヒッチハイカーの話す Cockney 英語に注目し、ユーモアがどのように生まれているのかを探りながら、この作品における言語的仕掛けについて考えてみたい。

テキストは Roald Dahl, *The Collected Short Stories of Roald Dahl* (Penguin, 1992) を使用した。[以下 ( ) の中に引用したページ番号を記す。]

## 1. ‘The Hitchhiker’ における登場人物とあらすじ

まず、この作品の登場人物とあらすじについて簡単に説明する。

登場人物は、作家の私と謎の人物であるヒッチハイカーと警察官の3人だけである。

作家である私が自慢の愛車でロンドンに向かう途中でヒッチハイカーを乗せ

る。彼を乗せた直後に、スピード違反で警察官に止められ色々調書を取られるが、ヒッチハイカーのおかげで、警察に後日出頭しなくてもよくなった。ハッピーエンド (happy ending) で終わっているが、果たしてそうなのかということについて考えてみたい。

それでは、‘The Hitchhiker’が、いかにプロットが巧みに構成されていて、読者を引きつけるためにどのような言語的仕掛けがなされているのかを、物語のプロットの展開に沿って分析を試みることにする。

## 2. プロットの構成と導入部、展開部の描写

この‘The Hitchhiker’のプロットの構成は以下のようになっている<sup>1)</sup>。

導入部 (729頁1行目～731頁22行目まで)

展開部 (731頁23行目～734頁11行目まで)

終結部 (734頁12行目～739頁15行目まで)

短編作家が作品を書く場合、導入部の冒頭のシーンの描写ほど神経を使うことはない。なぜならば、冒頭の1行目から読者の心をしっかりとつかむことができなければ、読者が次のページをめくる可能性がきわめて少ないからである。それでは冒頭の描写がどのように表現されているのかを考えてみたい。作品は次のように始まっている。

[以下、この論文における太文字表記は筆者]

I had a **new** car. It was an **exciting** toy, a **big** BMW 3.3 Li, which means 3.3 litre, **long** wheelbase, fuel injection. It had a **top** speed of 129 mph and **terrific** acceleration. The body was pale blue. The seats inside were darker blue and they were made of leather, **genuine soft** leather of the **finest** quality.

The windows were electrically operated and so was the sunroof. The radio aerial popped up when I switched on the radio, and disappeared when I switched it off. The **powerful** engine growled and grunted impatiently at slow speeds, but at sixty miles an hour the growling stopped and the motor began to purr with pleasure. (729)

短編の始まりが、自然の風景描写などではなく、大型の3.3リットルの排気量をもつBMWの新車の描写である。ダールの数ある短編の中で、冒頭が車の描写で始まる短編はこの作品だけである。

それでは、なぜ著者のダールはあえて車を前景化 (foregrounding) させたのかという理由について説明を加えることにする。この冒頭は8文から成り立っている。形容詞に注目すると太文字で示したいわゆるプラスの形容詞 (new, exciting, big, long, top, terrific, genuine, soft, finest, powerful) が10個使用されている。

注目すべき点は2つ目の文章の toy という単語である。3.3リットルの排気量のBMWの新車を、「わくわくするようなおもちゃ」であると述べていることからして、この車の持ち主である作家の私が裕福なお金持ちであることがわかる。車は新車で、座席には本革が使用され、トップスピードが129マイルも出ること、また窓は電動式で開閉が自由で、ラジオのアンテナがスイッチを入れると飛び出す仕組みになっていて、エンジンも強力であることなど、このBMWの素晴らしさが詳しく表現され、高級車種であることが分かる。

次に、この車を止めさせ乗り込んできた謎の人物であるヒッチハイカーが、どのように描写されているのかを考えてみたい。あたかもネズミ人間 (human rat) であるかのように描写されている。

He was a small ratty-faced man with grey teeth. His eyes were dark and quick and clever, like rat's eyes, and his ears were slightly pointed at the top. He

had a **cloth cap** on his head and he was wearing a greyish-coloured **jacket with enormous pockets**. The grey jacket, together with the quick eyes and the pointed ears, made him look more than anything like some sort of huge human rat. (729)

彼が「布製の帽子 (a cloth cap) をかぶっていた」という表現から、彼が労働者階級の間人であることがわかる。また「ジャケットに並外れて大きなポケットがついている (jacket with enormous pockets)」という表現から、すりをした後に盗んだものを入れておくために、相当大きなポケットが必要であることもわかる。あえて中立的な語である big を使用せずに enormous という単語を使用して、読者の注意を引くための誇張表現 (hyperbole) を使用している。歯は灰色で顔はネズミ顔、目はネズミのようによく動き、耳の先端がとがり、灰色のジャケットを身につけていて、まるで風貌はネズミ人間そっくりである。

さらに、彼の話す英語が典型的な Cockney 英語で、Received Pronunciation (RP) として知られる容認発音と比較され、この短編の要所で面白みを引きだす道具立てになっていることもわかる。

しかし、この男の指の描写は、彼の体全体から受ける暗いネズミ (rat) のようなイメージとは対照的に、以下のように、beautifully, slim, long, elegant などの副詞や形容詞が使用されて、美しく優美に描かれている。

I glanced at his fingers. They were so **beautifully** shaped, so **slim** and **long** and **elegant**, they didn't seem to belong to the rest of him at all. They looked like the fingers of a brain surgeon or a watchmaker. (735)

まるで彼の指が、「脳外科医か時計職人の指に似ている (like the fingers of a brain surgeon or a watchmaker)」という表現になっており、指が前景化されている。この謎の人物であるヒッチハイカーは、していることは他人のポケット

からお金を気付かれないように抜き取っているので、職業は完全にすりであるといえる。しかし、なぜか自分の仕事に強いプロ意識と誇りを持っていて、自分のことをすり (pickpocket) と言わずに、指細工師 (fingersmith) と婉曲的に呼んでいる。

一方、ヒッチハイカーを乗せた私の職業はプロの作家である。作家というものは、プロ意識と誇りを持ち、あまり他人や時間に束縛されずに、自分の意思において行動できる点ではお互いに共通するところがあると言える。

次に、車内において私とヒッチハイカーとの会話で明らかになったことについて考えてみたい。

### 3. 私とヒッチハイカーとの会話で明らかになったこと

まず、作家の私は、物腰が柔らかく素直な性格で人の良さが表れている点である。若い頃にヒッチハイクをして、車内で色々な質問をされた苦い経験があるので、好奇心は旺盛であるが同乗者に私的な質問などをして困らせたりしていない。新車の高級車 BMW に乗っていることからして、私はおそらくプロの流行作家で裕福なお金持ちであると思われる。妻のサファイアの指輪 (a beautiful old sapphire ring) の修理のために、ロンドンに向かっていることも文中から明らかになる。ヒッチハイカーがもっとスピードを出せと言ったので、思いっきりアクセルをふかしてスピード違反で捕まるが、少しも同乗者を悪く言っていない。白バイ (a BMW R90S) につかまり、警察官からスピード違反は刑務所行きだと嘘を言われても、その言葉を真に受けて信じている。お人好しであるが、世間知に疎いことが判明する。

警察官というものは、イギリスにおいて the Establishment の象徴である。しかしこの警察官は、態度が横柄で、作家の車につば (痰) を飛ばしたり、乱暴な言葉使いをしたり平気で嘘をつくような非常識な人間として描かれている。スピード違反で、BMW に同乗していたヒッチハイカーに対して調書を取って

いた際、彼に向かって「お前の顔が気に食わない、ただそれだけだ。」と暴言を吐いたりしている。悪を懲らしめ正義を守る権威の象徴である警察官のイメージが、この短編においてずたずたにされている。

次に主人公であるヒッチハイカーの性格や信条について考えてみたい。

彼は間違いなく職業はすりである。しかし前にも述べたように、自分のことをすり (pickpocket) ではなく、指細工師 (fingersmith) であると断言している。Fingersmith という音の響きは、金細工師 (goldsmith)、銀細工師 (silversmith) などを連想させて、創造的で粋な響きがある。また、自分の職業に誇りを持ち、自分の哲学を大切にしている。つまり信条として、貧乏人からはお金を盗まなくて、競馬などの勝者や金持ちだけ (the winners and the rich) から盗むという哲学を持っている。彼は Cockney 英語を話しているので、ロンドンの下町か大ロンドン (greater London) に住んでいると推測される。警察官の質問に対して、免許証を見せ自分の住所が、14, Windsor, Luton と判明する。Luton はロンドンの北西約 70 マイルの距離にあるので、greater London の地域に入るので、そこでは Cockney 英語が話されている。氏名は Michael Fish と判明するが、発音が microfiche と似ていて、どうも胡散臭い感じがしないでもない。また、苗字が Fish であることから fishy であるかもしれない。しかし、スリの腕前 (技術) は超一流で、警察官は 2 冊の警察手帳、作家の私はベルトや靴ひもや腕時計や運転免許証やキー・ホルダーなどをすられたことに最後まで全く気付いていなかった。

車内の作家とヒッチハイカーとの会話や取り調べの際の警察官との会話などから、ヒッチハイカーは作家を 'You are my pal.' と呼んでいること<sup>3)</sup>、スピード違反で捕まった原因を自分 (ヒッチハイカー) のせいにしなかったことで作家に好印象を持っていること、タバコを巻く時の指の早さを作家にほめてもらったこと、つまり自分を褒められ、その職業 (すり) の腕前を認めてもらったことで嬉しい気分になり、作家の私から盗んでいたものを返そうという気になったと思われる。

次に、ヒッチハイカーの話す Cockney 英語や破格文法の例をテキストから抜き出し、どんな言語的特徴が備わり、どこにおかしみが隠されているのかを明らかにしていきたい。

#### 4. ヒッチハイカーの話す Cockney 英語と破格文法の例

文法的に破格のしゃべり方をしている例をいくつか抜き出し、簡単に説明を加えることにする。

##### ● 述語動詞が主語に呼応していない非標準的用法の例

1. There's an awful lot of bad writers around. (730)
2. All car-makers is liars. (731)
3. Pickpockets is coarse and vulgar people who only do easy little amateur jobs. (737)
4. You writers really is nosy parkers, aren't you? (734)
5. We was caught good and proper. (734)
6. That's why I 'as to be extra careful 'oo I'm talking to, you see. (735)
7. But it don't do to tell everythin' to a copper. (734)
8. And when you see someone collectin' a big bundle of notes, you simply follows after 'im and 'elps yourself. But don't get me wrong, guv'nor. (738)

1 から 5 までの文では、主語が複数名詞であるので、当然それに呼応して述語動詞は、1 から 4 までは are, 5 ではどちらも were でなくてはならない。6 から 8 の文では、順番に 6 が 'ave(have), 7 が doesn't, 8 が follow, 'elps が 'elp (help) が正用法である。初歩的な文法上の誤りを犯しているので、ヒッチハイカーの話す英語から、教養があまりない人物であることがわかる。

●二重否定（double negation）の用法の例

9. You wouldn't be drivin' about in a car like this if you weren't no good at it.  
(730)
10. You **never** saw **nothin'**. (737)
11. I **never** takes **nothin'** from a loser. **Nor** from poor people **neither**. (738)

文法的には否定語が二回繰り返されると肯定の意味になるが、これらの例では意味的に否定のままである。これも非標準的用法のひとつである。

●Themの文法的に間違った用法の例

12. There's no fun working **them** lousy machines and selling tickets to mugs.  
(730)
13. The folks I despise **is them that** spend all their lives doin' crummy old routine jobs with no skill in 'em at all. (730)
14. I only go after **them as** can afford it, the winners and the rich. (738)

12では、those, 13ではare those who, 14では、those whoが文法的に正しい。Thoseをthemで置き換えているのも非標準的用法である。また13と14のthemの後のthatやasは関係代名詞のwhoにしなければならない。これらも初歩的な文法上の間違いである。また、13の文において、themを'emとしているのも、無教養な人々の英語に見られる非標準的用法の特徴である。

●Ain'tの例

15. That's right, **ain't** it? (735)

ain'tの代わりに、isn'tを用いるのが正用法である。Ain'tは非標準的用法である。

● インフォーマルな表現やスリ仲間で使用されそうな俗語の例

以下の 20 の用例が見出された。それぞれの語句の意味を書き、簡単に説明を加える。

16. *guv'nor* (729) = *guvnor* 「旦那」
17. *mugs* (730) 「お人好し, かも」
18. **crummy** *old routine* (730) 「くだらない」いつものお決まりの仕事
19. a tidy **packet** (730) かなりの「大金」
20. *My sainted aunt!* (731) 「なんてことだ」
21. *That's torn it.* (731) 「それですっかり形無しだ」
22. In the **clink**. (734) 「刑務所, プタ箱」の中で
23. a **whoppin'** big fine (734) 「べらぼうに高い」罰金
24. **hefty** fine (734) 「多額の」罰金
25. a **copper** (734) 「警察官」
26. *nosy parkers* (734) 「詮索好きな人」
27. *daft* (735) 「ばかな」
28. *twerp* (735) 「ばかもの」
29. *titchy* (735) 「ひどく小さい」
30. A **rotten** *cardsharper!* (736) 「いかさま」トランプ師
31. *You're darn right.* (736) 君は「全く」正しい
32. a miserable **racket** (736) みじめな「仕事」
33. *nick* (737) 「盗む」
34. *lift* (737) 「盗む」
35. *easy meat* (738) 「お人好し, かも」

「かも」を示す 17 や 35 の *mugs* や *easy meat*, 「大金」を示す 19 の *packet*, 「仕事」を示す 32 の *racket*, 「刑務所」を示す *clink*, 「警察官」を示す *copper*, 「盗む」を示す *nick* や *lift*, 「べらぼうに高い, 多額の」を示す 23 の *whoppin'* や

24の *hefty*, などの語句はスリの仲間内で聞こえてくるような表現である。ヒッチハイカーの英語はここに挙げたインフォーマルな表現や俗語の例から、作家の私の話す英語と比べてがさつに響く。

●強調構文において *that* や *who* が省略されている例

36. It's only pickpockets get caught. (738)

動詞の *get* の前に *that* や *who* が入れば正用法である。

1 から 36 まで、ヒッチハイカーの話す英語の表現について説明を加えたわけであるが、あまり教養がない労働者階級の出身者であることが判明した。語法上、初歩的な文法上の誤りをしている。また、すり仲間で使用するような専門的な俗語を多用していることもわかった。

次に、ヒッチハイカーの話す *Cockney* 英語について述べてみたい。まず *Cockney* 英語の音声的特徴について論じ、このヒッチハイカーの話す英語のユーモアについて例をあげ、説明を加えることにする。音声面において、標準音である容認発音を話している作家の私の音声と好対照をなしている。

## 5. ヒッチハイカーの話す英語の音声とユーモア

まず最初に、どれくらいの人口が *Cockney* 英語を話しているのかということについて簡単に述べ、その次に容認発音と *Cockney* 英語との違いについて、体系的に音の変化を記述する。

*Cockney* 英語は従来「ロンドンのイースト・エンドにある *St Mary-le-Bow* 教会の鐘の音が聞こえるところで生まれた人が話していることば」であると言われているが、その定義では数千人しか話していないように受け取られてしまう。しかし現在では *all London* や *Greater London* 地域の人が話す英語と解釈すると、その数は700万人にも上り、*Outer London* までを含めると、*Cockney* 英

語を話す人口は1,200万人にも達すると説明している。

*Practical Phonetics and Phonology* の著者である Beverley Collins と Inger M. Mees はその著書の中で、Cockney 英語の音声的特徴は何かについて具体的に被験者（ロンドンの南東 Lewisham 出身の電話技師である Steve）の話す英語を録音し、以下のように分析している<sup>4)</sup>

分析による Cockney 英語の音声的特徴について簡単に記す。

まず、Cockney 英語は、r 音を発音しない non-rhotic である。また、h 音の消失は同じ話者でも、単語によっておこる場合とおこらない場合がある (variable h-dropping)。*‘Move it over’* のように、母音にはさまれた閉鎖音 /t/ が声門閉鎖音となる t-glottalisation がおきる。*‘Wall’* のように母音のあとの /l/ の発音は暗く、l の母音化 (l-vocalisation) がおき、[ʊ] のような響きになる。また、/iŋ/ の発音が [-ɪn] と発音される。

多くの話者は /θ/ を [f]、/ð/ を [v] と置き換えて発音する傾向 (th-fronting) がある。*‘Tulip’* や *‘knew’* において、/tju:/ が [tʌ:]、/nju:/ が [nɜ:] となり、/j/ が落ちるヨッド消失 (yod-dropping / coalescence) がおきる。*‘Come’* における短母音の /ʌ/ が前舌の大きく口をあける [a] のように発音される。*‘Need’* や *‘move’* における長母音の /i:/ や /u:/ が [əi] や [əu] のように発音される。二重母音推移 (diphthong shifts) がおき、/eɪ/ が [aɪ]、/aɪ/ が [ɔɪ]、/əʊ/ が [aʊ] と発音される。また、*‘house’* の二重母音 /aʊ/ が [a:] や [ɛə] のように発音される。また、*‘bed’* や *‘van’* における短母音の /e/ や /æ/ の発音は、口の開きが狭くなる傾向がある。*‘Bath’* という単語の発音においては、短母音の /æ/ よりも長母音の /ɑ:/ を用いる傾向がある。

以上が Cockney 英語の音声的特徴である。この短編において、最も心地よい発音と言われている容認発音を話しているのが作家の私であり、最も不快な発音と言われている Cockney 英語を話しているのが hitchhiker である。

Cockney 英語では、語頭の /h/ 音の消失 (h-dropping) や /iŋ/ の発音が [-ɪn] となるのが、音声的特徴として顕著であるが、そのおかしみについて例をあ

げて考えてみたい。ヒッチハイカーの話す英語は、まさに上記で述べた Cockney 英語の特徴を備えている。

- a. The secret of life is to become very very good at somethin' that's very very 'ard to do. (730)
- b. An 'od carrier, officer, is a person 'oo carries the cement up the ladder to the bricklayer. And the 'od is what 'ee carries it in. It's got a long 'andle, and on the top you've got bits of wood set at an angle... (733)
- c. 'I don't have false teeth,' I said.  
'I know you don't,' he answered. 'Otherwise I'd 'ave 'ad 'em out long ago!' (738)

a. の文では、something が somethin' になって /-ing/ が [-ɪn] となっていること、hard で /h/ 音が消失し、'ard になっていることである。また、very の繰り返しは話し手の英語が稚拙で、無教養な人物であるという印象を読者に与えている。

b. の文では、/h/ 音が消失して、hod carrier が 'od carrier, who が 'oo, hod が 'od, he が 'ee, handle が 'andle になって、このヒッチハイカーの話す英語に警察官が戸惑っていることがうかがわれる。Hod carrier は技術を必要とする bricklayer (煉瓦職人) と異なり、煉瓦を運ぶだけの単純労働者である。しかし、耳で聞いただけでは /h/ 音が落ちて、odd carrier と聞こえるため、何か「奇妙な運び人」と解釈されて、話が通じなくなる可能性が高い。それゆえ、警察官が彼の英語に痺れを切らしている。ここにも音声面からユーモアが込められていると言える。

c. の文では、ヒッチハイカーが「さもないと私なら入れ歯などずっと前に抜いてしまっていたらろう」と答えているが、'Otherwise I'd 'ave 'ad 'em out long ago!' を発音してみればお分かりのように、母音の音素(二重母音が4回、

短母音が7回) が続けざまに11回も響き渡り、発音がしにくくなっている。容認発音に慣れている読者は、ヒッチハイカーの話す英語に思わずくすくと笑ってしまうのである。

## 6. 終結部の描写とブラックユーモア

この短編の終結部はダールの得意とするどんでん返しで終わっている。作家である私の台詞に注意して、どこにブラックユーモアが隠されているのかについて考えてみたい。

短編において、終結部の描写は導入部の冒頭の描写と同様に大切である。ではどのように、この短編が終わっているのかについて言語表現に注意して分析してみたい。

終結部は以下のように終わっている。

I nearly swerved the car into a milk truck, I was so **excited**.

‘That copper’s got nothin’ on either of us now,’ he said.

‘You’re a **genius**!’ I **cried**.

‘Ee’s got no names, no addresses, no car number, no nothin’,’ he said.

‘You’re **brilliant**!’

‘I think you’d better pull off this main road as soon as possible,’ he said. ‘Then we’d better build a little bonfire and burn these books.’

‘You’re a **fantastic** fellow!’ I **exclaimed**.

‘Thank you, guv’nor,’ he said. ‘It’s always nice to be appreciated.’ (739)

すりであるヒッチハイカーが作家の私に、警察官の手帳を盗み、今ここに持っていることを打ち明け、これから車を止め、たき火をしてその警察手帳を燃やそうと語っている場面である。すりの腕前に対して、作家の私が感嘆の言

葉を発している。3回も畳みかけるように、感嘆を表す名詞や形容詞が使用されている。3行目の「天才」を意味する *genius*、5、8行目の「素晴らしい」を意味する *brilliant* や *fantastic* などの単語から、そのことがうかがえる。また、それぞれの文の最後には、驚きを表す感嘆符が計3回使用されている。

しかし、この作家はあまりにもはしゃぎすぎている感がある。作家の心的状態を表す動詞を見ると、中立的な語である *said* ではなく、感情動詞 (*emotive verb*) が3回使用されている。1行目では、*excited*、3行目では、*cried*、8行目では、*exclaimed* が使用されている。それに対して、ヒッチハイカーは冷静に会話していることが、*said* (2, 4, 6, 9行目) の4回の繰り返しでわかる。

前にも記したように、このヒッチハイカーの信条は、「貧乏人からは金を盗まず金持ちから盗む」ということであった。冒頭の新車のBMWの描写を克明に描き前景化している理由は、読者に強くこの作家がお金持ちであるということ的印象付けるためであった。すりであるヒッチハイカーは、この作家に狙いを定めて車を止めさせ乗り込んできたと解釈できる。この段階になってもまだ作家の私は、自分がヒッチハイカーに狙われていたことに気付いていないほどのお人好しで能天気な人間であることが露呈する。ここにブラックユーモアが隠されていたことを知り、読者は啞然とするのである。

この短編の最後のヒッチハイカーの台詞は、*'It's always nice to be appreciated.'* で終わっている。「人に感謝されることはいつもいいことですね」という意味であるが、本来語であるアングロサクソン語ではなく、外来語であるラテン語に由来する動詞の *appreciate* を用いて、仰々しい改まった表現になっている。その直前の文で、作家の私に対して *sir* を用いず、旦那を意味する *guv'nor* を用いていることを考えれば、*appreciate* を用いた表現はあまりにも不自然で不釣合である。

「どういたしまして」という意味ならば、*'Don't mention it.'* か *'It's kind of you to say so.'* か *'It's always nice to be told that.'* などの表現が自然である。あえて

ヒッチハイカーに appreciate という動詞を用いて返答させているところにも、ユーモアが隠されているのである。労働者階級であるヒッチハイカーが、お金持ちである作家よりも、上から目線で優越感に浸っていることがうかがえる。読者は思わず階級 (class) の立場が逆転したことに、微笑み快感を覚えるのである。また、音声面から分析すると、ヒッチハイカーの勿体ぶったこれらの表現が、5. ヒッチハイカーの話す英語の音声とユーモアで指摘したように、容認発音ではなく Cockney 発音で話されていることを考慮すると、さらにおかしみが増すのである。ダールが意図した言語的仕掛けの一端が垣間見られる。

## お わ り に

以上の点から、この ‘The Hitchhiker’ という短編は、ユーモアが至る所に散りばめられ、言語表現も巧みで論理構成もしっかりとされていて、ダールが短編作家として「完璧な技巧家」であることを証明している作品であると言える。

### 註

- 1) Roald Dahl, *The Collected Short Stories of Roald Dahl* (London: Penguin, 1992), 729-739.
- 2) Dahl (1992), 737.
- 3) Dahl (1992), 737.
- 4) Beverley Collins and Inger M. Mess, *Practical Phonetics and Phonology* (London: Routledge, 2008), 163.

### 参 考 文 献

- Dahl, R. (1984) *Boy: Tales of Childhood*. London: Penguin.
- Dahl, R. (1986) *Going Solo*. London: Penguin.
- Dahl, R. (1992) *The Collected Short Stories of Roald Dahl*. London: Penguin.
- Dahl, R. (1993) *My Year*. London: Jonathan Cape.
- Dahl, R. (2005) *D is for DAHL*. London: Penguin.
- Powling, C. (1983) *Roald Dahl: A Biography*. London: Puffin.
- Treglown, J. (1994) *Roald Dahl: A Biography*. London: Faber and Faber.
- West, M. I. (1992) *Roald Dahl*. New York: Twayne.